

私の所属研究室、ついて来てもらってイイですか?



若 者

尾花理徳*

Could you come to my laboratory?

Key Words : the harder route, confidence, appreciation

今、ハマっているテレビ番組がある。それはテレビ局の方が、街中で一般人に声をかけ、家について行き、その人の人生ドラマに迫るものである。人それぞれ色々なことを抱えこの世を生きている姿を見て、感動したり勇気をももらったりしている。では、私が、街中で声をかけられたらどうだろうか。家についてきてもらって問題ないのだが、ドラマチックさがない。間違いなく撮れ高ゼロであろう(いや、ディレクターさんの編集技術とビートルズの Let It Be のエンディング曲で感動を巻き起こすかもしれない)。本稿では、「若者」が揺らぎ始めた、人生の折り返し地点での折角の機会なので、研究の面からこれまでの私の歩みを振り返らせていただく。私の所属研究室、ついて来てもらってイイですか?

幼稚園児のころの卒業文集を見返すと、将来の夢は「かがくしゃ」と書いてある。なんとも可愛げのない夢だ。なぜそう思ったのか記憶にはないのだが、当時大学教員として研究を行っていた父親の影響を少なからず受けていたのであろう。しかし、その後その夢は、野球選手となりサッカー選手となっていた。所謂学者肌のように身の回りの事象に「なぜ?」と思うことは一切なく、小学生の頃の自由研究は父親という無償 kit を使用していたほど、研究というものに興味はなかった。大学受験時も、特にや

りたいことがあるわけでもなく、家族の影響からフラフラと薬学を志望し、京都薬科大学へ進学することとなる。このような形で進学したので、特に夢を持つこともなく大学生生活が過ぎていった。大学3年生の研究室配属時、中田徹男先生の授業が面白く、かつ研究室の明るさに惹かれ、臨床薬理学教室を希望し、配属された。研究室では腎・循環器疾患を対象に研究をさせていただいたが、研究室配属1日目、ラットの大腿動静脈にカニューレを、いとも簡単に挿管する先輩の姿が格好良く見え、憧れた。当時、研究の本質を理解してはいなかっただろうが、とりあえず楽しかったように思う。さて、大学も卒業まで1年弱となり、そろそろ人生を本気で考えていかなければならない時期に差し掛かる。周りは、就職活動をし、内定を勝ち取ってくる。私は、父親の影響と、研究する先輩への憧れから大学院進学を考える。そこで、そのまま所属研究室内で進学をするか、それとも環境を変えるかとの悩みになる。その時、先輩から、「道に迷ったときは自分にとって苦しい道を進め」と言われ、何かが吹っ切れた。加えて、自分の思うようにいかなかったときは、こう生きよう!と腹が決まり、学外への挑戦を決めた。

大阪大学大学院薬学研究科修士課程に進学でき、故東純一先生、藤尾慈先生の下、サイトカイン治療による新規心不全発症予防法の開発を目指した研究に取り組みさせていただくこととなった。具体的には、インターロイキン(IL)-11が心筋梗塞後の心筋リモデリングに与える影響を評価するものだった。そのためには、マウスの心筋梗塞モデルを確立する必要があった。これは、当時の私にとって大きな壁であったが、大学時代の先輩の姿への憧れがあったせいか、毎日のように数時間、動物実験施設に籠り練習することも苦ではなかった。就職活動の時期には、社会に出る勇気がなく博士後期課程への進学を早々



* Masanori OBANA

1983年4月生まれ
大阪大学大学院 薬学研究科 応用医療
薬科学専攻 博士後期課程(2011年)
現在、大阪大学大学院 薬学研究科
臨床薬効解析学分野 准教授
博士(臨床薬学) 専門/分子腎臓病・循環器学
TEL : 06-6879-8252
FAX : 06-6879-8253
E-mail : obana@phs.osaka-u.ac.jp

に決意する。なんとか心筋梗塞モデル作製の壁を乗り越え、一定の成果が出始めた修士2年の頃、初めての学会発表として海外学会に参加する機会を頂いた。若気の至りか準備不足のまま参加し、いや準備の仕方がわかっていなかったのかもしれないが、何の質問にも答えられずボコボコにされた。この経験は今でもトラウマである。傷心した後、数か月はモチベーションが上がらず、暗黒の時期を過ごしたように思う。どう暗黒の時期を乗り越えたか、今となっては覚えていないが、気持ちが乗らなくても、やるべきことを淡々とやっていたのだろう。その結果、非臨床（動物実験）レベルではあるが、IL-11が心不全発症予防に有用であることを示すことができた^{1,2}。先生方や、日々励ましてくれる仲間の存在が支えとなり、私自身が納得する以上の研究成果を取ることができた。なお、現在はIL-11のヒト心疾患に対する効果を検討する臨床試験が行われている。

さて、そろそろ社会にも出なければならぬ時期がきた。大学院時代の経験から、自ら見出した治療標的に基づく薬作りをしたいとの思いから製薬会社での研究を志望する。と言いつつ、薬学部出身、博士課程出身にありがちな進路を進んだまで、である。この時も思うようにいかなかったときの覚悟があり、強気で就職活動に挑んでいた。大学で腎臓研究を経験していたこともあり、有難いことに製薬企業の研究者として、腎臓病に対する創薬研究に従事する機会をいただいた。企業では尊敬できる先輩にも恵まれ、また薬剤の申請を見据えた信頼性保証下での非臨床薬効薬理試験を担当させて頂き、社会実装の観点から見た研究のあり方を考える機会もあった。しかしながら、入社当初からモヤモヤとしたものを抱いていたのも事実だ。好奇心の赴くままに研究がしたかったのだと思う。社内でも、自分のしたいことを主張し周囲を巻き込めばよかったのだが、立ち振る舞いが不器用だった。そのような時、出身研究室の教員としてのポストが空く。何か環境を変えなければと思っていた私には地獄で仏であったが、大学教員は個人の研究力や教育力がより顕著に試されると考えており、そのような立場でやっていける自信はなかった。しかし、先輩からの「自信はちょっとずつつけていけばいいんだよ」との言葉が後押しになり、挑戦することとした。現在、腎臓病の治療標

的を探索する研究を中心に行っている。研究室では、つい先日研究室に配属されたと思っていた学生が、いつのまにか学生同士で研究のディスカッションをしている等、学生が日々成長していく姿を見ることができ、教員として冥利に尽きる。今は、生命科学の裾野を広げ、人々の健康に貢献したいという夢ができ、また学生にはとにかく研究活動を楽しんで欲しいと強く思う。

振り返ってみると、私の人生にも私なりのドラマがあったのだと感じる。フラフラと運任せに生きてきたつもりであったが、いつのまにか好きと思えることに出会い、時々ちょっとした勇気を持って挑戦していた。また、意外にも一応は「かがくしゃ」という夢を叶えていた。その裏では、何よりも恩師や同僚、家族の存在や言葉が支えとなっていたことを再認識できた。

そろそろ Let It Be が聴こえてきたようである。まだまだ研究者の端くれだ。今後も、周りの仲間感謝しながら、自分らしくも研究者として精進していく所存である。そして、教育者として、少しでも学生のドラマの脇役になればと思う。

尾花の所属する研究室についていったところ、、、運に身を任せながらも、恩師や同僚、家族に励まされながら、時々挑戦的に生きる姿を見ることができました。

以上、乱筆乱文で恐縮であり、読者の皆様に比べれば到底ドラマチックさはないが、ほんの少しでも興味をそそる部分があれば幸いである。

謝辞

これまでの人生で叱咤激励頂きました恩師、同僚、家族に深謝申し上げます。また、本稿執筆の機会を与えてくださいました大阪大学大学院薬学研究科教授、小比賀聡先生並びに「生産と技術」関係者の方々に感謝申し上げます。

1. Obana M, et al. Therapeutic administration of IL-11 exhibits the postconditioning effects against ischemia-reperfusion injury via STAT3 in the heart. American Journal of

Physiology Heart and Circulatory Physiology.
303(5): H569-77, 2012.

2. Obana M, et al. Therapeutic activation of

STAT3 by interleukin-11 ameliorates cardiac
fibrosis after myocardial infarction.
Circulation. 121(5): 684-91, 2010.

